

日露戦争の勝利が大東亜戦争の遠因

戦争には必ず遠因と近因があり、契機があります。即ち戦争というものは歴史の中にあるのであり、正しく歴史を理解することが、正しく戦争を理解することになります。戦争は歴史的背景を無視してはあり得ないのです。

例をあげますと、忠臣蔵です。十二月十四日に本所松坂町に四十七人が切り込んだことだけを忠臣蔵だとしますと、「真夜中に土足で他人の家に押し込み、年寄りの白髪首を切っただけのことじゃないか！」となります。

これは正しく忠臣蔵を理解しているとは言えません。忠臣蔵と言えば、少なくとも松の廊下から始まって、浅野内匠頭が切腹を仰せつかり、赤穂城を明け渡し、浪人になった家臣たちが主君の無念を晴らすため、忠義の心を

もって身をやつし、偽装し、敵情を探り、苦勞を重ねて、松坂町の討入りになるわけです。討入りになるまでのことを知っていませんと、忠臣蔵を理解することは出来ません。本所松坂町から始まっては、正しい歴史にはならないのです。

これと同じように「日本が先に真珠灣を攻撃したから、日本が悪いんだ」では歴史ではありません。真珠灣に至るまでの、長い歴史があるのです。このことを理解する必要があります。

それでは真珠灣に至るまでの歴史を一緒に勉強しましょう。前述しましたように、コロンブスがアメリカ大陸に到着した五百年前から、西洋の侵略が始まり、アフリカ・中南米・アラビア・アジアといった世界全般、特に有色民族に対しての侵略行為・暴虐行為・搾取がありました。その侵略はトインビーの言葉を借りれば「羊の毛を刈るが如く」で、西欧は常勝だったのです。

しかし、一九〇四―五年に、極東の島国たる人口四千万の百姓国日本、この背の低い有色人種が、世界一の白人帝国主義のロシアを敗ったのです。これは驚天動地のことでした。五百年間敗れたことのない白人に、初めて有色人種が勝ったのです。これによってアジアを始め世界の有色人種が目覚めたのです。これが日露戦争の世界史的意義です。そして前述の様に、日本が日露戦争に勝ったことが大東亜戦争の遠因になるのです。米大統領セオドア・ルーズベルトの斡旋で、ポーツマス条約が結ばれますが、この当時からアメリカは満州を狙っていたのです。具体的に申しますと、小村寿太郎外相が日本に帰る前に、アメリカの鉄道王ハリマンが日本に乗り込んで来て、桂太郎総理に「あの南満州鉄道を共同経営しようではないか、アメリカが資金を出すから、両国で使おうではないか」と持ちかけます。桂は日本も多額の借金をしてやっとな勝ったのだから、これはいい話だとのりまです。しかし小村が帰国して「何ということをされるのですか。これでは十万の命と、二十億の国幣が一空に帰してしまうではないですか。日清戦争から日露戦争にかけての犠牲が全部無駄になってしまう。両戦役の犠牲は、一本の満州鉄道の権利を獲得することにあつたのだ。」と主張して破談にします。

これを聞いたルーズベルト大統領は何と言ったか。「間違はなく日本の陸海軍はアメリカの敵である。全世界にこれ以上危険な敵はいない。」と怒ったというのです。この時からアメリカは、日本を敵視し、シナ大陸（特に滿蒙）に対する権利を狙って進出します。しかしそのためには日本が邪魔であります。日本の力をいかにして

削ぐか、いかに日本をやっつけるかを考え始めたのです。

日露戦争でバルチック艦隊が沈められた時に、孫文はロンドンにおりました。当時日英同盟のよしみで、イギリスはバルチック艦隊が現在どの位置にいるかを教えてくれるなど、協力的でした。お金も貸してくれました。ですから、バルチック艦隊を東郷艦隊が敗った時、イギリスはさぞ喜ぶであろうと、孫文は思いました。ところが、あにはからんや、ロンドンはしーんとして通夜のようであったそうです。何故かと孫文は考えました。これについて孫文は「血は水よりも濃し」と言っています。つまりイギリスもロシアも同じ白人です。「白人同士が有色人種を支配し、植民地を持つことによって繁栄してきた。しかるに同じ白人のロシアが敗れたということは、やがて植民地が独立する一つの象徴であり、前兆である。」とイギリスは危惧したのです。ですからロンドンはしーんとしてしまったのです。ドイツ皇帝のウィルヘルムは黄禍論を唱えました。やがて有色人種の日本が世界に勢力を伸ばし、これまで侵略した自分らの植民地が覆るのではないか、黄禍の時代がくるのではないか、と心配したのです。